

哲學研究總目錄

(自大正五年四月創刊號)
(至昭和七年十一月第二百號)

第一卷 (大正五年)

現代の哲學	西田幾多郎	號月	一四一頁
精神物理的法則	千葉 胤成	三二五—三三六	三三六—三五三
佛像の美術史的研究	松本文三郎	一四	六〇—一〇四
社會的教育學の過去及將來	小西 重直	二〇五—二二九	二二九—二五九
ベルナルド、ホルツァーノ	中川 得立	二〇—二二五	二二五—二七六
社會意識の成立	高田 保馬	二五	一四一—二七六
普遍に就いて	田邊 元	二五	一七〇—二二〇
繪畫に於ける自然性の價值	植田 壽藏	三六	二五九—三二八
—一九一〇年以後のカンディンスキイ	藤井健治郎	三六	三二八—三三六
正義觀念の變遷	高田 保馬	三六	三三六—三六三
社會の本質に關する考察	高田 保馬	三六	三六三—三七五
心能の相關研究上の一問題	高田 保馬	三六	三七五—三九四
宗教的情操の内容及び基礎	宇野 圓空	三六	三九四—四二二
支那上代の巫、巫咸に就いて	狩野 直喜	四七	三九四—四二二
ホルツァーノの哲學	中川 得立	四七	四二二—四七七
感情移入說非難概括	深田 康算	四七	四七七—五〇八
メーヌ・ドゥ・ピランの出づる迄	錦田 義富	五八	五五—五五五
集團心理現象の概念及び本質	米田庄太郎	五八	五五—五五五
經濟哲學の問題	左右田喜一郎	五八	五五—五五五
感情に關する一新學說	千葉 胤成	五八	五五—五五五
東方亞細亞の教育に關する一節	小西 重直	五八	五五—五五五
リツケルトの歴史學の觀念に就て	安部晴之助	五八	五五—五五五
フイヒテの宗教哲學の發展	朝永三十郎	五八	五五—五五五
カントの「判斷力批判」に就て	深田 康算	五八	五五—五五五
メーヌ・ドゥ・ピラン	深田 康算	五八	五五—五五五
實踐的感覺主義より理論的感	錦田 義富	五八	五五—五五五
覺主義へ	錦田 義富	五八	五五—五五五
人格の權利に就て	西 晋一郎	五八	五五—五五五
自覺に於ける直觀と反省(未完)	西田幾多郎	五八	五五—五五五
—藝文上より續載	西田幾多郎	五八	五五—五五五
クロツエの實踐哲學	尾北光三郎	五八	五五—五五五
記憶に關する心理的假說	深田 武	五八	五五—五五五
視覺に於ける有利左利	黒田 源次	五八	五五—五五五
基督敎に於ける神の内在觀	目野 貞澄	五八	五五—五五五

シヤンカラの眞智に關する思想に就て
 社會學的認識論
 女子の使命に就いて
 藝術的活動の本質

本田 義英	八二	二〇三—二〇三
米田庄太郎	九二	二〇一—二〇五
野田 義夫	九二	二〇五—二〇九
中川 得立	九二	二〇八—二二〇

第二卷 (大正六年)

セザンヌ
 美學の基礎に就ての考察(未完)
 探究の態度と安立の態度

植田 壽藏	一〇一	一一—三三
深田 康算	一〇一	三三—四八
西田幾多郎	一〇一	四八—五七
平内房次郎	一〇一	五七—六〇
高瀬武次郎	一〇一	六〇—六九
田中 廣吉	一〇一	六九—七九
榑崎淺太郎	一〇一	七九—八六
藤井健治郎	一〇一	八六—八七

自覺に於ける直觀と反省(承前)
 琉球過去の文化と教育
 周易に見えたる倫理說(五則)
 個人的差異に因由する學校組織の新運動と將來の學校組織
 聯想反應作用の速度發達の経路及び其の標式
 倫理上の見地より觀たる所謂社會防衛說

西田幾多郎	一〇一	七三—七三
平内房次郎	一〇一	七三—七三
高瀬武次郎	一〇一	七三—七三
田中 廣吉	一〇一	七三—七三
榑崎淺太郎	一〇一	七三—七三
藤井健治郎	一〇一	七三—七三

哲學研究總目錄

宗教的規範意識
 數理の認識
 剪嵌細工視的空間圖の測定
 コーエンの非有(フー)に就いて
 ヘルマン・ロツツェ
 ガヤーナングの性行
 リボー先生の想ひ出
 ガヤーナングの思想
 感情に關する諸問題
 社會の全體と部分
 公理體系の二種
 宗教の社會的表現に就いて
 神社と宗教
 ニイツェの學制論
 時 間 論
 感情の心理(リボーの學說)
 論理的に就て
 懺悔としての哲學
 ロツツェ 妥當說の由來(未完)
 ロツツェの時代
 若きヴェルテルの悩み
 平等觀個人主義(平民主義)と差別觀個人主義(貴族主義)

赤松 智城	三三	三〇—三〇
田 邊 元	三三	三八—四四
黒田 源次	三三	四四—四五
岡野留次郎	三三	四五—五〇
朝永三十郎	三四	五〇—五四
羽濱 了諦	三四	五五—六三
野上 俊夫	三四	六四—六八
羽濱 了諦	三四	六九—七四
千葉 胤成	三四	七五—八四
高田 保馬	三四	八五—九七
岡 正造	三四	九八—一〇〇
宇野 圓空	三四	一〇一—一〇六
松本文三郎	三四	一〇七—一〇九
小西 重直	三四	一一〇—一一一
田邊 元	三四	一一二—一一三
野上 俊夫	三四	一一四—一一五
故野崎 廣義	三四	一一六—一一七
故野崎 廣義	三四	一一八—一二〇
錦田 義富	三四	一二一—一二二
朝永三十郎	三四	一二三—一二四
成瀬 無種	三四	一二五—一二六
藤井健治郎	三四	一二七—一二八

自然科學的認識の性質

安部晴之助

號月 頁
六 9 二三五—二四三

コイエンの倫理說

西 晋一郎

元 10 二四五—二七〇

ミカイロヴスキ一の社會學說の
創始的價值(未完)

米田庄太郎

元 11 10 二七一—二〇二
二四二—二四四

大鹽中齋の學說

高瀬武次郎

二 12 11 二七三—二八〇
二八四—二八七

ルソオの畫ける自然

植田 壽藏

三 11 二〇一—二〇三
二〇四—二〇五

力の觀念の歴史的發達

桑木 義雄

三 11 二〇四—二〇六
二〇七—二〇八

最近のライブニッツ研究に就て

錦田 義富

三 12 二四五—二四九
二五〇—二五二

學說の發達

中島 力造

三 12 二四〇—二四七
二四八—二五〇

デューイの教育論(未完)

篠原 助市

三 12 二四六—二四八
二四九—二五一

第三卷 (大正七年)

意識とは何を意味するか

西田幾多郎

三 1 一一六

客觀的心理學に就て

千葉 胤成

三 1 二九—三三

社會的正義に就て

藤井健治郎

三 1 四一—八〇

デューイの教育論(承前)

篠原 助市

三 1 八一—二〇八

美しき靈の告白

成瀬 無極

三 1 一九—二九

ヤリジュナザルキヤの見たる
希臘輪廻思想

本田 義英

三 2 二二—二四

獨逸唯心論に於ける哲學的
認識の問題

田邊 元

三 2 二五—二〇八
二〇九—二一一

ミカイロヴスキ一の社會學說の
創始的價值(承前)

米田庄太郎

三 2 二〇九—二二四
二二五—二二七

精神物理學の職分に就いて

岩井勝二郎

號月 頁
二 2 二三五—二四七

輪廻轉生と解脫

齋藤 唯信

二 3 二五七—二六四

極限概念(Limitation)として
の文化價值

左右田喜一郎

二 3 二七〇—二八一

神祕主義の爲に

故岡本 春彦

二 3 二八四—二九三

本邦に於ける祖先崇拜の形式及
意義の變遷

春山 作樹

二 4 二四二—二四八

ストウムプの情覺說

野上 俊夫

三 4 二四九—二五六

象徴と觀念—藝術と哲學— 故岡本 春彦

故岡本 春彦

三 4 二四九—二五七

ロツツエ妥當說の由來(承前未完)
(ライブニッツを中心として)

錦田 義富

三 4 二七〇—二七三

喜劇と妄想(未完)

今村 新吉

三 5 二五九—二六三

カールライルの思想の哲學的背景

朝永三十郎

三 5 二六四—二六八

美術史の對象

植田 壽藏

三 5 二六九—二七二

左右田博士の著「經濟哲學の諸
問題」を讀む

田邊 元

三 5 二七三—二七六

感 覺

西田幾多郎

三 6 二七六—二八三

識用作用の非相稱性に關する
實驗的研究

千葉 胤成

三 6 二八四—二八八

美學の基礎に就ての考察(承前)

深田 康算

三 6 二八九—三〇二

フイドラー「近代自然派と藝術
上の眞」

勝部 謙造

三 6 三〇三—三〇六

心情の無限

西 晋一郎

三 7 三〇七—三一一

感 情

西田幾多郎

三 7 三一一—三〇七

司馬遷の經學

心理學と客觀的方法(未完)

高次の對象

呪術に於ける合理性の意識

シュタムラーの社會哲學
(客觀道德學の定礎に關して)

ゾユルケムの評及び其の社會學的研究

ディルタイの記載的分析的心理學

美の具象性

實踐理性批判の根本問題に就て

個別的因果律の論理に就きて
左右田博士の教を乞ふ

ヘルマン・ユーンに就て

デカートの「規則論」に現はれたる批判論的思想

交替遠近錯覺の變換時間に就て

米國に於ける黑人教育の發達

法理と倫理

奥義書と起信論(起信論は果して支那撰述なるか)

ライプニッツ哲學の意義

狩野 直喜 元 7 八八一八七

檜崎淺太郎 元 8 八八一八七

中川 得立 元 8 八七一七六

宇野 圓空 元 8 九七一四九

藤井健治郎 元 8 九六一九六

銅直 勇 元 8 一〇〇一—一〇〇九

勝部 謙造 元 9 一〇三—一〇四五

深田 康算 元 9 一〇六—一〇六七

世良 壽男 元 9 一〇六—一〇七

田邊 元 元 9 一〇六—一〇七

中川 得立 元 9 二二—二四

朝永三十郎 元 9 二四—二六

黒田 源次 元 10 二五—二七

小西 重直 元 10 二六—二八

安部晴之助 元 10 二八—三〇

羽溪 了諦 元 11 二七—二九

田邊 元 元 11 二七—二九

個別的因果律に關して更に 左右田喜一郎 元 11 二五七—二五七

田邊博士の教を俟つ ロガンに於ける肉體的和精神的 植田 壽藏 元 12 一三七—一四七

生命と思辨(フイヒテ研究より) 久保 正夫 元 12 一四八—一四八

ソフィストとソクラテス 波多野精一 元 1 一五〇—一五三

カントの歴史哲學 米田庄太郎 元 3 一五三—一五九

黒白系統の兩眼視現象につきて 黒田 源次 元 1 一五九—一五七

「ター」論(穂積及柳博士の論文を讀みて) 赤松 智城 元 1 一五六—一六〇

創造的衝動と生産的衝動に就て 岡 頼三 元 1 一六三—一六四

經驗内容の種々なる連続 西田幾多郎 元 2 一六四—一六四

白、灰色及び黒の兩眼視現象通論 黒田 源次 元 2 一六五—一六五

心理學と客觀的方法(承前) 檜崎淺太郎 元 2 一六九—一七〇

エミール・プロトルー 勝部 謙造 元 2 一七〇—一七一

中島教授薈去 藤井健治郎 元 2 一七二—一七三

機能的宗教心理學 石神 徳門 元 3 一七三—一七三

賓主未分 久松 眞一 元 3 一七三—一七三

將來社會觀の種々 高田 保馬 元 3 一七三—一七三

支那思想史より觀たる河南省 服部宇之吉 元 4 一七三—一七三

藥師寺三尊論 土田 杏村 元 4 一七三—一七三

アリストテレスの倫理と經濟	藤井健治郎	號月	四一六—四二一	兼常 清佐	號月	四一九—一九九	
實踐的感情移入説に就て	尾生光三郎	毛 4	四二一—四二九	浦川 源吾	四 9	一九〇—二〇〇	
最近心理學の發達	深田 武	毛 4	四二九—四三九	小西 重直	四 9	二〇一—二〇〇	
E. M. Titchener氏の精神物理學的方法と其の應用(一)	岩井勝二郎	三 5	四三九—四四六	錦田 義富	四 10	二〇一—二〇五	
意志の内容	西田幾多郎	三 5	四四七—四五六	河瀬 憲次	四 10	二〇六—二二〇	
無 意 識	千葉 胤成	三 5	四五七—四六〇	勝部 謙造	四 10	二二一—二四二	
戒律の社會學の見解	谷本 富	三 5	四六一—四七四	岩井勝二郎	四 10	二四三—二七〇	
心理的非心理的	務臺 理作	三 5	四七五—四八四	田邊 元	四 11	二七一—二八六	
讀み方の難易(Teschke)に關する實驗に就いて	野上 俊夫	三 6	四八五—四九三	宇野 圓空	四 11	二八七—二〇四	
ケーベル博士論文集	深田 康算	三 6	四九四—五〇六	手島 文倉	四 11	二〇五—二二七	
支那の精神に就いて	狩野 直喜	四 7	五〇七—五二六	左右田喜一郎	四 11	二二八—二六三	
シユェルリングに於ける絶對者の概念	久保 正夫	四 7	五二七—五三六	高瀬武次郎	四 12	二六四—二九〇	
形式論理學の對象	安部晴之助	四 7	五三七—五八三	齋藤 唯信	四 12	二九一—三三三	
テカートの「規則論」に於ける「直覺」	朝永三十郎	四 8	五八四—六〇三	高田 保馬	四 12	三三三—三四〇	
感覺の強度に關する疑義	橋崎淺太郎	四 8	六〇四—六二四	本卷第一—三册の頁附(一五〇九—一八六八)は前卷を承く。			
フィンセント・ファン・ホッフ	植田 壽藏	四 8	六二五—六三五	第四册は三六一頁より始まる。			
フヒテの道德學に就ての考察	世良 壽男	四 8	六三六—六五七				
意識の明暗に就いて	西田幾多郎	四 9	六五八—六九七	北來の國土と其藝術	松本亦太郎	四 1	一—四二
				道德と幸福との關係について	藤井健治郎	四 1	四三—六七
				佛教の預言説(承前)	手島 文倉	四 1	六八—七五

第五卷 (大正九年)

神と創造	久松 眞一	頁 1	六二—二三	ピアノのむつかしさに就て	兼常 清佐	頁 6	五七—五七五
基本的と附加的と	野上 俊夫	頁 1	二四—二〇	諸種の社會の相互關係	高田 保馬	頁 6	五七—六二
認識主觀の問題(承前未完)	田邊 元	頁 2	二二—一〇	—重に國家と全體社會との關係について—	浦川 源吾	頁 6	六二—六五
プラトニーの美學(未完)	深田 算康	頁 2	一六—一七	元曲に見えたる支那の婚俗	佐々木月樵	頁 6	六三—六四七
生活準備と連續的發展	篠原 助市	頁 2	一六—一七	「我」より見たる自覺教と救濟教	錦田 義富	頁 7	六七—六八
調音感覺の屬性に就いて	岩井勝二郎	頁 2	一九—二〇	定言命令の一般性と個性との關係に就て	植田 壽藏	頁 7	六八—七〇
在支外人の支那人教化運動と其の動機	田中 廣吉	頁 2	二〇—二六	ユウセエマ・ドラクロア	松本文三郎	頁 7	七一—七九
美の本質	西田幾多郎	頁 3	二七—二九	古代埃及の藝術に就いて	三木 清	頁 7	七〇—七八
アカートの倫理思想とカントの倫理說	朝永三十郎	頁 3	二五—二七	個性の理解、小さき思索	手島 文倉	頁 8	七九—八二
相對的變化關發達の客觀的內觀的考察	榑崎淺太郎	頁 3	二七—二九	原始僧團に於ける比丘の極重罪	西 晋一郎	頁 9	八二—八四
約翰傳福音書の宗教哲學的思想	日野 眞澄	頁 3	三〇—三三	自然の理性化	三木 清	頁 9	八五—九〇
心理的前定に就いて	務臺 理作	頁 3	三三—三六	批判哲學と歴史哲學、カント哲學への瞥見	岩井勝二郎	頁 9	九〇—九六
喜劇と妄想(承前未完)	今村 新吉	頁 4	三五—三七	精神測定の原理としての誤差の法則	藤井健治郎	頁 10	九七—一〇三
フイヒテの歴史哲學	久保 正夫	頁 4	三九—四二	社會科學の性質に關するコーンの見解に就て	三宅 剛一	頁 10	一〇三—一〇七
優良兒教育の沿革	伊藤 猷典	頁 4	四三—四九	判斷對象の構成に就て	世良 壽男	頁 10	一〇七—一一一
現實主觀	河瀬 憲次	頁 5	四三—四七	倫理學の對象としての道德的價値判斷の性質に就て	米田庄太郎	頁 11	一一一—一一七
藝術家の悩み	成瀬 無極	頁 5	四七—四八	近代勞働者階級の哲學思潮	務臺 理作	頁 11	一一七—一二三
視野闊爭過程の一般的性質	黒田 源次	頁 5	四八—四九	知覺と想像			
睡眠に就て	深田 武	頁 5	五〇—五二				

アッハの意志説
 カントとシュライエール
 マツヘル(未完)
 基督教修道院の宗教思想

第 六 卷 (大正十年)

意識の程度に就て
 教育の基礎觀念としての自我
 古神道に於ける道德意識と
 その發達
 前行の視野鬭争の後行の視野
 鬭争に及ぼす影響
 喜劇と妄想(承前未完)

認識主觀の問題(承前)
 意志の本質
 カントとシュライエールマッヘル
 (承前未完)
 バウル、ナトルプ「ベスタロフチ
 の理想主義一九一九年」を読む
 ナン氏の教育説
 カントの永遠的平和論の半面
 兒童期に於ける精神發達の停滞
 現象に就いて

大脇 義一 號月 三五—三三九
 勝部 謙造 五 12 二四七—二六二
 日野 眞澄 五 12 二六三—二七四
 千葉 胤成 五 1 一—一五
 吉田 熊次 五 1 一六—四七
 村岡 典嗣 五 1 四八—六八
 黒田 源次 五 1 六九—二八
 今村 新吉 五 2 二九—三三
 田邊 元 五 2 三三—六九
 大脇 義一 五 2 七〇—八六
 勝部 謙造 五 2 八七—九九
 長川 新 五 2 一〇〇—一二
 伊藤 徹典 五 2 一三—三三
 朝永三十郎 五 3 三五—五三
 楡崎淺太郎 五 3 五四—六五

合理性對非合理性の問題を通じて觀たる「極限概念の哲學」
 感情の内容と意志の内容
 歴史的原因律の問題
 プラトニーの美學(承前未完)
 社會的教育學の概念
 救濟の論理
 精神物理學上の二三の問題に就いて
 道德の特質に就て
 繪畫の對象
 漢書藝文志の歴史觀
 哲學と生活
 ハウプトマンの神祕主義
 關係對象に就いて
 思惟の心理學的研究に就いて
 伊藤仁齋の教育效果論
 シーク教の過去及び現在
 理念としての神の實在性
 眞善美の合一點
 教育學の論理

左右田喜一郎 號月 三〇七—三三九
 西田幾多郎 六 4 三〇—三三九
 三木 清 六 4 四九—四九九
 深田 康算 六 5 四七—四八四
 篠原 助市 六 5 五〇—五〇八
 久松 眞一 六 5 五九—五七七
 岩井勝二郎 六 5 五八—五五
 西 晋一郎 六 6 五七—五八
 植田 壽藏 六 6 六二—六四五
 丹羽 正義 六 7 六五—七六
 勝部 謙造 六 7 七〇—七七
 成瀬 無極 六 7 七六—七六
 務臺 理作 六 7 七六—七九
 大脇 義一 六 8 七九—八八
 高橋 俊乘 六 8 八二—八九
 手島 文倉 六 8 八九—九二
 濱田 興助 六 8 九二—九二
 西田幾多郎 六 9 九三—九三
 辻 幸三郎 六 9 九三—九三

佛敎史上に於ける日本天台戒律の意義

合衆國に於ける公民科敎授

カントに於ける認識客觀性の問題(未完)

勞働の倫理

シエリシカに於ける自由の哲學の發展(未完)

文化價值體系問題

博愛主義と利己主義

ミレエ

宗教と形而上學(フヒヒテの宗教哲學の研究)

二點關以下に於ける觸知覺型に就いて

第七卷 (大正十一年)

社會の地域的解放

ガントの平和觀に就て

個性の問題

文化價值體系問題(承前)

カントに於ける認識客觀性の問題(承前未完)

教育活動の本質

宮城 信雅 卷9 1000—1006

伊藤 猷典 卷9 1007—1010

岡野留次郎 卷10 1210—1214
1215—1218

藤井健治郎 卷10 1215—1216

世良 壽男 卷10 1217—1218

米田庄太郎 卷11 1217—1218

高瀬武次郎 卷11 1218—1219

植田 壽藏 卷11 1219—1220

久保 正夫 卷12 1219—1220

岩井勝二郎 卷12 1220—1221

高田 保馬 卷1 1—3

朝永二十郎 卷1 3—6

三木 清 卷1 6—7

米田庄太郎 卷1 7—10
11—12
13—14
15—16

岡野留次郎 卷2 13—15
16—17

勝部 謙造 卷2 15—17

シエリシカに於ける自由の哲學の發展(承前)

朱子の禮説

セリオニイの社會生理學

精神力量學

カント哲學に於ける實踐的の意義

社會と個人

シムタムラーの法理的範疇論について

教育強制の權利根據に關する

コーン氏の説

プラト一の美學(承前未完)

徒網瑠二經の成立年代と其敎理とに就て

エルドマン「再生の心理學」に就いて

順世外道論

抽象的心理學と具體的心理學と

大寶令に定められたる大學寮の教育史上における意味

喜劇と妄想(承前)

社及社會考

世良 壽男 卷5 121—127
128—130

浦川 源吾 卷3 131—132

銅直 勇 卷3 133—134

橋崎淺太郎 卷3 135—136

務臺 理作 卷4 137—138
139—140

西田幾多郎 卷4 141—142

恒藤 恭 卷5 143—144
145—146
147—148

伊藤 猷典 卷5 149—150

深田 康算 卷5 151—152

宮城 信雅 卷5 153—154

大脇 義一 卷5 155—156

手島 文倉 卷6 157—158
159—160
161—162
163—164

野上 俊夫 卷6 165—166

高橋 俊乘 卷7 167—168

今村 新吉 卷7 169—170

浦川 源吾 卷8 171—172
173—174
175—176

源吾 卷8 177—178
179—180

實在と教育
メノン研究
黒
實驗的内省に就いて
行爲的主觀
美と善
繪畫の優劣は如何にして可能なるか
アツハの近業概念形成の實驗的研究
財産の倫理的性質
宗教的規範意識に關する考察
社會の概念
歴史に於ける普遍關係
什譯法華提婆品に就いて
ホルツァノの自傳
新獨逸の道德教育
惜手バルト教授
パウリ氏の心理學現狀論
質有様相と因果律の問題
(ニコライ、ハルトマン)

本卷頁附一一七八—一一八七重複

第八卷 (大正十二年)

大西友太	號月	七 8	八〇—八四七
菊池慧一郎	七 8	八四八—八六六	
黒田源次	七 8	八七〇—八九六	
岩井勝二郎	七 9	九〇一—九二七	
西田幾多郎	七 9	九六〇—九九五	
西田幾多郎	七 9	九六六—一〇〇四	
植田壽藏	七 10	一〇二七—一〇五四	
大脇義一	七 11	一〇五五—一〇七六	
藤井健治郎	七 11	一〇七六—一一〇九	
菅圓吉	七 11	一一一〇—一一二五	
銅直勇	七 11	一一二五—一一三六	
丹羽正義	七 11	一一三七—一一四七	
松本文三郎	七 11	一一四七—一一五三	
西田幾多郎	七 11	一一五三—一一五九	
小西重直	七 12	一一六一—一一六六	
伊藤猷典	七 12	一一四〇—一一四四	
岩井勝二郎	七 12	一一五五—一一五九	
務臺理作	七 12	一一六〇—一一七六	

規 範

男女共學について
歴史の意義に關してギリシア思想とヘブライ思想
常識的實在論の基礎づけ
教育學方法論
繪畫の優劣は如何にして可能なるか(承前)
公羊家の文化階段説
法と道徳
メデイカスの道德的評價の二原理
個體概念を通じて觀たる「形而上學の要求」
デカート哲學に關する二三の考察
兒童精神力の性的差異
認識論より見たる相對性理論(カッシラー)
山鹿素行に於ける古學思想の發達
神學の方法論に關する一考察
主觀的普遍に就て
物理學の基礎
(ダヴィッド・ヒルベルト)

西晋一郎	號月	八 1	一一七
野上俊夫	八 1	一一一—一三〇	
波多野精一	八 1	一三一—一五五	
久松眞一	八 1	一五七—一六四	
伊藤猷典	八 2	一四一—一五九	
植田壽藏	八 2	一八三—一八七	
小島祐馬	八 2	一八七—一九七	
西田幾多郎	八 2	一九七—二〇〇	
世良壽男	八 2	二〇〇—二〇九	
河瀬憲次	八 3	二〇一—二〇七	
朝永三十郎	八 3	二〇八—二二六	
榑崎淺太郎	八 3	二二九—二五三	
岡野留次郎	八 3	二五三—二五五	
加藤仁平	八 4	二七〇—二七五	
久松眞一	八 4	二八〇—二八三	
務臺理作	八 4	二八六—二八七	
三土興三	八 4	二八七—二九五	

道 德 的 美

綜合的統一について

コントの社會連帶思想

バスカルの「賭」

「宋子の學」

綜藝種智院について

道徳獨特の實現方法

カントの 'Noumena' と先驗的自

佛陀と摩訶毘羅

シルラーが美學上の功績

社會的正義に就いて

(正義の本質)

ケーベル博士の逝去

無 我 論(未完)

社 會 意 識

直接に與へられるもの

教育概念の基礎づけ

歴史的と藝術的

内部知覚と其對象に就て

深田 康算 六五 四八—四三三

三宅 剛一 六七 四三—四三三

米田庄太郎 六五 四三—四三三

小林太市郎 六五 四三—四三三

浦川 源吾 六七 四三—四三三

高橋 俊乘 六七 四三—四三三

西 晋一郎 七六 四二—四七四

木村 素衛 六七 四二—四三三

羽溪 了諦 六八 七九—七八

深田 康算 六八 七九—七八

藤井健治郎 六八 七五—七九

深田 康算 六八 七五—七九

手島 文倉 六九 八二—八四

銅直 勇 六九 八二—八四

西田幾多郎 六九 八二—八四

伊藤 猷典 六九 八二—八四

西 晋一郎 六九 八二—八四

務臺 理作 六九 八二—八四

自律的法理的意義

ダントの詩 (ベネデット・クロチエ)

文化教育學の出づるまで(未完)

ヘッパリーン教授の計と氏の教育説の基底たる神の論證に就て

リンドゲオルスキ

「理論心理學提要」

公算論の諸原理 (ジャック・アダマール)

第 九 卷 (大正十三年)

文化教育學の出るまで(承前)

カントとシュライエルマッヘル (承前未完)

自由の可能に就て

シルラーが美學上の功績

無 我 論(承前)

カント體系の所謂缺陷問題 (Hegel's Phänomenologie des Geistes, 未完)

回教思想の特色

個體と自由

内部知覚について

恒藤 恭 六九 一〇五—一〇七

大賀 壽吉 六九 一〇五—一〇七

黒田 正利 六九 一〇五—一〇七

長田 新 六九 一〇五—一〇七

伊藤 猷典 六九 一〇五—一〇七

大脇 義一 六九 一〇五—一〇七

戸坂 潤 六九 一〇五—一〇七

長田 新 六九 一〇五—一〇七

勝部 謙造 六九 一〇五—一〇七

世良 壽男 六九 一〇五—一〇七

深田 康算 六九 一〇五—一〇七

手島 文倉 六九 一〇五—一〇七

平田 元吉 六九 一〇五—一〇七

三土 興三 六九 一〇五—一〇七

赤松 智城 六九 一〇五—一〇七

河瀬 憲次 六九 一〇五—一〇七

西田幾多郎 六九 一〇五—一〇七

コントの社會連帶思想(承前)	米田庄太郎	274	3	355—356
人格主義としてのカント倫理	藤井健治郎	276	4	354—356
アレンタノの精神現象の分類	島崎 得道	278	4	357—363
靈魂觀念の分化について	宇野 圓空	284	5	357—358
ダンテとトマス・アクキナス	黒田 正利	285	5	356—358
令制の國學について	高橋 俊乘	285	5	358—359
カント生誕二百年記念會に際して	朝永三十郎	285	5	359—360
實在に就て	久松 眞一	285	5	359—360
ベストロッターの宗教々育	小西 重直	286	6	355—360
宗教的對象としての歴史的人格	菅 圓吉	286	6	355—363
カントの目的論	川邊 元	286	6	354—365
視覚に於ける水線及び錘線の成立	植田 壽藏	287	7	361—373
歴史と教育	大西 友太	287	7	361—370
教育目的としての價值體系	伊藤 猷典	287	7	361—376
武士道の起源及び特質	高橋 俊乘	288	8	361—376

第十卷 (大正十四年)

具體的人性の研究 (ホール先生を弔ふ)	野上 俊夫	108	8	873—876
山鹿素行に於ける士道論的思想の發達	加藤 仁平	109	9	891—900
故マックス・フリースハイゼンケラーの教育學界に於ける業績	伊藤 猷典	109	9	901—1003
フィロストラトスの「構想力」	深田 康算	110	10	1131—1132
das Reale と das Ideale (シチリシテ)	西谷 啓治	111	11	1131—1133
カントの同一哲學を中心として	戸坂 潤	112	12	1137—1140
カントと現代の科學	戸坂 潤	112	12	1137—1140
勞作教育の問題	小西 重直	113	1	113
物理的空間の成立まで (カントの空間論)	戸坂 潤	113	1	113—116
時の原始的樣態に就て	務臺 理作	113	1	117—118
詩的想像力と狂氣(ティルタイ)	高坂 正顯	113	1	117—118
教育方法の原理	伊藤 猷典	113	2	117—118
カントに於ける transzendentaler Gegenstand と affiziert werden とに就て	木村 素衛	113	2	117—118
物理的空間の實現	戸坂 潤	113	2	117—118
形態性論 (フオン、エーレンフェルス)	岩井勝二郎	113	3	117—118

現代に於ける教育學の基礎付け	長田 新	二〇九	二八五—三〇二
ファイヒテの知識學に關する一考察	河瀬 憲次	二〇九	四〇四—四三〇
直觀知と物自體(未完)	田邊 元	二〇九	三〇三—三三〇
ミケランゼロ	植田 壽藏	二〇五	三六—三七七
理念に就いての歴史	ロバート・シンチンゲル	二〇五	四四八—四六〇
的和非歴史的	岡野次留郎譯	二〇五	五三—五五〇
歴史的時間の問題(ジンメル)	高坂 正顯	二〇五	六二—六六六
管家遺誠とその和魂漢才說	加藤 仁平	二〇五	四八—五五〇
社會學の一元論的方針とモナド論的方針(デュルケムの社會學方針に對する一考察)	淡 徳三郎	二〇五	七〇〇—七三〇
教育哲學の要綱	伊藤 猷典	二〇六	五三—五五八
過渡經驗に就て	大脇 義一	二〇六	五九—五四七
モーアの宗教發生論	菅 圓吉	二〇六	四八—五五八
惡に就て	西 晋一郎	二〇七	六五—一六〇
呪術の發生に關する問題	宇野 圓空	二〇八	六七—一六六
古代支那人崇拜の大神、特に「五祀」に就いて	浦川 源吾	二〇八	八四—一八四
印度のヒルローン	羽溪 了諦	二〇八	六六—一七五

ファイアカントの社會學概念に於ける二三の問題	五十嵐 信	二二四	七七一—八三三
我が國古代の道德と儒教(未完)	高橋 俊乘	二二四	九七一—九四一
無明原理論	手島 文倉	二二四	二七—二九四
働くもの	西田幾多郎	二二五	八四六—一八七〇
精神科學の心理學と青年教育の基礎的研究	小西 重直	二二六	九一九—一〇〇六
テイルクタイの心理學的理念の基本的なるものに就いて(未完)	橋崎淺太郎	二二六	一〇八—一一〇
論理的普遍妥當性と美的普遍妥當性	赤松 元通	二二六	一一—二二九
モーアの教育作用說	伊藤 猷典	二二六	二〇—二四五
社會と模倣	銅直 勇	二二六	二四—二五五
カントに於ける「自然」概念の一つの意味(未完)	高坂 正顯	二二七	二五—一三三
朱子の禮論に關する一考察(未完)	後藤 俊瑞	二二七	二三八—二四四
カント哲學と數學的自然科學	朝水三十郎	二二七	二四五—二六五
知覺判斷に就いて	赤松 元通	二二八	一一—一七
テイルクタイの心理學的理念の基本的なるものに就いて(承前未完)	橋崎淺太郎	二二八	一六—一七
我が國古代の道德と儒教(承前)	高橋 俊乘	二二八	一六—一七

第十一卷 (大正十五年)

ディルタイの哲學的方法(未完)	勝部 謙造	二八 1	六〇—七〇
機械作用と身體の個性(未完)	大西 友太	二九 2	一〇一—一七〇
神曲の倫理思想及びその組織	黒田 正利	二九 9	一六〇—一九〇
朱子の禮論に關する一考察(承前)	後藤 俊瑞	二九 2	一八四—一九九
プロテイノスとカント	波多野精一	二九 2	二〇一—二二九
作用心理學瞥見	大脇 義一	三〇 3	二二五—二四六
眞俗二諦の史的考察	齋藤 唯信	三〇 3	二九一—三〇七
ライブニッツと美學(未完)	深田 康算	三〇 3	二九一—三〇七
プロテイノスの絶對について	久松 眞一	三三 4	三〇一—三二〇
音樂理論の研究	須永 克巳	三三 4	三二五—三三九
詩的表現の對象としての惡(アレントナー)	三宅 實	三三 4	三三〇—三三九
物的及心的現象と感覺	高瀬 安貞	三三 5	三三九—三四〇
カントに於ける「自然」概念の二つの意味(承前)	高坂 正顯	三三 5	三四一—三四九
場所	西田幾多郎	三三 6	三四三—三四六
ディルタイ著「哲學の本質」の邦譯に就いての質疑	戸田 三郎	三三 6	三四二—三四五
問の構造—解釋學的研究—	三木 清	三三 11	三六〇—三六八

現象學的傾向	坂田 徳男	二四 7	六九—六六六
ディルタイ著「哲學の本質」の邦譯に就いて	勝部 謙造	二四 7	六九七
教育學の性質につきての一考察	伊藤 徹典	二五 8	七〇—七五
宗教的體驗の受動的性質	佐藤 繁彦	二五 8	七五—七四三
—特に、ルツタの體驗について—			
カント倫理學に於ける Person 並に Personlichkeit の概念について	柳田謙十郎	二五 8	七五—七九
プラトンのパイドロス (ジョン・パリ)	田中美知太郎	二五 8	八〇—八八
權威に就いて	藤井健治郎	二六 9	七九—八二六
形式化と普遍化	本多 謙三	二六 9	八七—八七五
西田哲學の方法に就いて	左右田喜一郎	二七 10	九三—九四三
—西田博士の教を乞ふ—			
プラトンの「パルメニデス」E—B について	田中美知太郎	二七 10	九三—九八
—所謂「第三の人間」とプラトンのイデア論—			
範疇としての空間について	戸坂 潤	二七 10	九八—一〇三
直觀知と物自體(承前未完)	田邊 元	二八 11	一〇五—一〇五
靜 物	鼓 常良	二八 11	一〇五—一〇六
プラトン 哲學私斷第一・三部論(未完)	菊池慧一郎	二八 12	一〇三—一〇四
寺子屋起源論について質疑	高橋 俊乘	二八 12	一〇三—一〇三

第十二卷 (昭和二年)

ディルタイの心理學的理念の基本的なるものについて(承前)

プラトン哲學私斷第一・三部論(承前)

カントの宗教論に於ける歴史の問題 附、最高善の演繹

ベスタロツチーと其百年記念祭

ベスタロツチーの直觀論

ベスタロツチー遺跡巡禮記

ベスタロツチーの手紙

寺子屋起源論について答ふ

辨證法の論理(未完)

機械作用と身體の個性(承前未完)

左右田博士に答ふ

十九世紀前半の佛蘭西畫壇に於ける寫實主義の變遷

無限に就いて

(ダヴィット・ヒルパート)

戒律より見たる佛敎の道德思想

社會心理的相互作用の過程

梶崎凌太郎 一〇一 一一八

菊池慧一郎 三三三 一九一―四四〇

高坂 正顯 一〇一 一〇一―二六

小西 重直 一三二 二一―四〇

長田 新三 一三二 一四―七六

野上 俊夫 一三二 一七―八三

有馬 良治 一三二 一八―二〇

石川 謙 一三二 二〇―三三

田邊 元 三三三 三三―四七

大西 友太 三三三 三〇―三三

西田幾多郎 一三三 三二―三五

小林太市郎 三三三 三六―三五

下村竜太郎 一三三 三六―四九

松本文三郎 三三三 四〇―四六

白井 二尙 一三三 五三―五八

ベルグソンに於ける時間と永遠 カント第三批判序文前稿 について

カント哲學に於ける神の存在の證明根據としてのテレオロギイ

先驗倫理學の概念と其の一問題

この教育

言 語(未完)

断 簡 三 片

行為に於ける純粹なるもの

精神分離症の心理學的說明原理としての社會的本能缺陷

社會的事象の形式と素材

ヒレボス篇とアリストテレスの形而上學第一章第六節(ヘンリ・ジャックソン)

第十三卷 (昭和三年)

龍樹哲學に於ける物自性の問題 (中論觀有無品の研究及解釋)

史學に於ける過去の認識

惡の問題に就いて

内觀論(コフカ)

先驗生成的方法について

唐木 順三 一三三 三九一―六七三

中井 正一 一三三 三九四―六九九

淡野安太郎 一七〇 七九一―七九五

柳田謙十郎 一七〇 七九六―七九九

高橋 俊乘 一三三 八〇一―八〇三

中井 正一 一三三 八〇一―八〇九

伊藤 猷典 一三三 八〇九―八七七

鳥 芳夫 一三三 八七七―九七七

今村 新吉 一四一 一〇〇一―一〇〇三

尾高 朝雄 一四一 一〇〇五―一〇〇六

高田 三郎 一四一 一〇〇九―一〇一六

紀津 紀三 一四一 一〇一〇―一〇一八

田邊 元 一四一 一〇二一―一〇二六

西谷 啓治 一四一 一〇二九―一〇三九

岩井勝二郎 一四一 一〇四一―一〇四〇

赤松 元道 一四一 一〇五二―一〇六六

バスタロツチーの勞作教育論	長田 新一	二〇二	二〇二	一八一—二〇六
通信 六 篇	伊藤 猷典	二〇二	二〇二	二〇二—二〇三
機械作用と身體の個性 (承前未完)	大西 友太	二〇三	二〇三	二〇三—二〇四
方法概念の分析	戸坂 潤	二〇三	二〇三	二〇三—二〇四
所謂認識對象界の論理的構造	西田幾多郎	二〇四	二〇四	二〇四—二〇五
言 語(承前)	中井 正一	二〇四	二〇四	二〇四—二〇五
辨證法の論理(承前未完)	田 邊 元	二〇五	二〇五	二〇五—二〇六
プラトンに於ける自體と存在	高田 三郎	二〇五	二〇五	二〇五—二〇六
日本教育史上の手習	高橋 俊乘	二〇五	二〇五	二〇五—二〇六
ゾントの個人心理學に於ける 基本概念	宇都宮仙太郎	二〇五	二〇五	二〇五—二〇六
アリストテレス倫理學の限界	小田 清	二〇六	二〇六	二〇六—二〇七
個性の問題と反省的判斷力	高山 岩男	二〇六	二〇六	二〇六—二〇七
カール・ビューラー「心理學の 危機」	大脇 義一	二〇六	二〇六	二〇六—二〇七
自己自身を見るものに於いてあ る場所と意識の場所	西田幾多郎	二〇七	二〇七	二〇七—二〇八
ウイリアム・ジェームスの認識 論と形而上學	高坂 正顯	二〇七	二〇七	二〇七—二〇八
認識の現象學的解明に就いて	連水 敬二	二〇七	二〇七	二〇七—二〇八
マツクス・シェーラーの計	長田 新一	二〇七	二〇七	二〇七—二〇八

空觀の哲學 存在より行へ
(龍樹哲學の根本問題)

コーヘンに於ける根源と非有
(未完)

解折論に於ける拒中律排棄の論
議に關する Otto Holder の一つの批評

海外 通信

睿智的世界

五十嵐講師を悼む

龍樹に於ける物と相の問題
(中論觀六種品の研究及解釋)

アリストテレスの運動につ

空觀の哲學 存在より行へ (龍樹哲學の根本問題)	稻津 紀三	二〇八	二〇八	八五—一〇七
コーヘンに於ける根源と非有 (未完)	由良 哲次	二〇八	二〇八	一〇七—一〇八
解折論に於ける拒中律排棄の論 議に關する Otto Holder の一つの批評	下村寅太郎	二〇九	二〇九	一〇八—一〇九
海外 通信	伊藤 猷典	二〇九	二〇九	一〇九—一一〇
睿智的世界	西田幾多郎	二〇九	二〇九	一一〇—一一一
五十嵐講師を悼む	白井 二尙	二〇九	二〇九	一一一—一一二
龍樹に於ける物と相の問題 (中論觀六種品の研究及解釋)	稻津 紀三	二〇九	二〇九	一一二—一一三
アリストテレスの運動につ	小島 威彦	二〇九	二〇九	一一三—一一四

第十四卷 (昭和四年)

直覺的知識	西田幾多郎	二一〇	二一〇	一一八—一二〇
「アウトノミー」と「ヘアットノ ミー」	赤松 元通	二一〇	二一〇	一二〇—一二一
ハンブルク大學より	由良 哲次	二一〇	二一〇	一二一—一二二
アミエルの日記の一節	故 深田 康算	二一〇	二一〇	一二二—一二三
張彦遠の論畫(未完)	伊勢草一郎	二一〇	二一〇	一二三—一二四
美意識の深底より見たる 光及び暗	植田 壽藏	二一〇	二一〇	一二四—一二五
童志、思惟及び直觀	鳥 芳夫	二一〇	二一〇	一二五—一二六
中世音樂觀概説(未完)	須永 克己	二一〇	二一〇	一二六—一二七

文學の體系

發音型態と聽取型態並にその藝術的展望

日本語に於ける存在の理解(未完)和辻

梵文唯識二十論和譯並びに註解

カントの第一アンチノミー第一部と先驗的觀念論

「問題」に關する理論

實質的價值倫理學の批判(未完)

數の對象性

二つの言葉の解釋に就て

實驗的方法としての先驗的方法

シェリングの哲學的方法について(未完)

家族結合關係の基礎

—現象學的試考—

アリストテレス形而上學に於ける本質の概念

ソクラテス以前の哲學に於けるピュシスの意味(岩崎氏に答ふ)

中論觀三商品の研究及び解釋

反省的判斷力の對象界

宗教體験の二様態

關 賴三

〔五〕 2
〔一五〕 3
〔一五〕 4
〔一五〕 6
〔一五〕 7
〔一五〕 8

中井 正一 〔一五〕 2

和辻 哲郎 〔五〕 2
〔五〕 4
〔五〕 5
〔五〕 6
〔五〕 7
〔五〕 8

稻津 紀三 〔一五〕 3

相原 信作 〔一五〕 3

戸坂 潤 〔一五〕 4

柳田謙十郎 〔一五〕 4

三宅 剛一 〔一五〕 5

高坂 正顯 〔一五〕 5

赤松 元通 〔一五〕 6

田中 熈 〔一五〕 6

後藤 孝弟 〔一五〕 7

田中美知太郎 〔一五〕 7

稻津 紀三 〔一五〕 8

眞下 信一 〔一五〕 8

渡邊 泰三 〔一五〕 8

〔一五〕 8

辨證法の論理(承前未完)

世界論の問題(未完)

ギュエーの時間觀念の生成(ベルクソン)

一般者の自己限定と自覺

實數の領域と連續

プラトンのイデアに就いて

藤 樹 學

二つの區別と根源的事實

(メーヌ・ドゥ・ビランの一考察)

本卷頁附七〇一—七九〇重複

シェリングの哲學的方法に就て

(承前未完)

スピノーザ哲學的方法に就て

ニーコラーウス・クサーヌス

原作と複製

世界觀の問題(承前)

意味の擴張方向並にその悲劇性

張彦遠の論畫(承前)

田邊 元 〔一五〕 9

高山 岩男 〔一五〕 9

服部英次郎 〔一五〕 9

西田幾多郎 〔一五〕 10

三宅 剛一 〔一五〕 10

杉 正俊 〔一五〕 11

加藤 仁平 〔一五〕 11

澤鴻 久敬 〔一五〕 12

赤松 元通 〔一五〕 1

島 芳夫 〔一五〕 1

服部英次郎 〔一五〕 1

植田 壽藏 〔一五〕 2

高山 岩男 〔一五〕 2

中井 正一 〔一五〕 2

伊勢專一郎 〔一五〕 3

〔一五〕 3

〔一五〕 3

〔一五〕 3

ロゴスの構造	久保虎賀壽	一六三	頁
デイルタイの倫理學思想	田中 照	一六九	頁
西田先生の教を仰ぐ	田邊 元	一七〇	頁
Existentialismus-Jdeal-Realismus	佐々木 勳	一七〇	頁
内容 作用 對象	下程 勇吉	一七〇	頁
起信論に於ける認識實踐の三相	廣瀬 文察	一七〇	頁
ヘーゲル「論理學」の理解(未完)	脇坂 光次	一七〇	頁
表現的自己の自己限定	西田幾多郎	一七〇	頁
中世紀繪畫様式の展開に就いての一考察	園 頼三	一七〇	頁
フォルケルト教授の思出	長田 新	一七〇	頁
「體驗及びその客觀化」としての歴史	船山 信一	一七〇	頁
哲學的眞理概念の形式とその變遷(カッシーラー)	由良 哲次	一七〇	頁
藝術の自律性に就て	植田 壽藏	一七〇	頁
カントの物自體とその由來	高橋 道生	一七〇	頁
ナトプに於ける「主觀性」に就いて	故錦田 義富	一七〇	頁
義務争闘の問題(未完)	田中 照	一七〇	頁
機能概念の美學への寄與	中井 正一	一七〇	頁
現代文化の争闘(シュメル)	伊達 四郎	一七〇	頁

第十六卷 (昭和六年)

プラトンに於ける思慕・想起及對話法の教育的意義並にその相互關係	石山 修平	一七五	頁
人間の相の下に(カント倫理學の研究)	小田 清	一七五	頁
全體性と感情	佐藤 幸治	一七五	頁
哲學的教育學と經驗的教育學との止揚點について	伊藤 徹典	一七五	頁
「純粹理性批判」の存在論的解釋について	脇坂 光次	一七五	頁
直觀空間の先驗的構造(ベツカー)	下村寅太郎	一七五	頁
歴史哲學の地位 その一前言的なもの	船山 信一	一七五	頁
辨證法に於けるシュライエルマツヘル(未完)	渡邊 泰三	一七五	頁
海 外 通 信	白井 二尚	一七五	頁
カントに於ける「人格」と人間性(未完)	和辻 哲郎	一七五	頁
ヘーゲルの歴史哲學	島 芳夫	一七五	頁
義務争闘の問題に對する一補遺(承前)	田中 照	一七五	頁
批判主義に於ける自由の問題(未完)	中林嘉太郎	一七五	頁
Tomo Stephens の人間學	西田 禎文	一七五	頁
フイヒテ哲學を流るゝ人格の意識	柳田謙十郎	一七五	頁

マックス・ウェーバーの社會學方法論

宗教の傳統とその他の問題

カール・フィリップ・モローリツツの美學

カントに於ける Kritik と Doctrin の記録について

ヘーゲルの論理學に於ける存在・本質・概念の聯關を中心として

永遠の今の自己限定哲學の發端(未完)

熊澤蕃山の教育思想

繫辭的存在

一般といふ言葉の意味について
プラトンに如何に哲學し始めたか(未完)

内と外の辨證法的雙關對立
ヘーゲルの絶對觀念論

目的論的・表現的・辨證法的
(未完)

本質觀照・絶對知・歴史的認識
ヘーゲルに於けるイデアと辨證法(未完)

第十七卷 (昭和七年)

哲學研究總目錄

重松 俊明	一八三 5	五九一—五六六
渡邊 泰三	一八二 5	五七—五六九
藤田 貞次	一八二 5	五九—六〇六
	一八四—一八三	六二—一〇三
	一八六—一八三	六四—一〇三
中井 正一	一八三 6	六三—六四
船山 信一	一八三 6	六三—六五
	一八三—一八三	六三—六六
	一八三—一八三	六三—六六
西田幾多郎	一八四 7	七九—七九
久保虎賀壽	一八五 8	八九—八五
後藤 三郎	一八五 10	八四—八九
	一八七—一八七	一〇五—一〇七
澤瀉 久敬	一八六 9	九六—九六
高坂 正顯	一八七 11	一〇三—一〇七
	一八七—一八七	一〇三—一〇七
後藤 孝弟	一八七 10	一〇〇—一〇三
寺尾 勇	一八八 11	一〇六—一〇六
田邊 元	一八九 12	一〇三—一〇三
	一九一—一九一	一〇三—一〇三
高山 岩男	一九二 12	一〇七—一〇九
船山 信一	一九二 12	一〇六—一〇六
脇坂 光次	一九二 12	一〇七—一〇七

カントに於ける「人格」と「人間性」(承前未完)

プラトンのドクサに就いて
ライプニツツに於ける個性の問題(未完)

自愛と他愛及び辨證法
陶冶の自發性(未完)

アウグステイヌの形而上學の將來(チルソ)

目的論的・表現的・辨證法的
(承前未完)

感情の深さの次元
美術史は作風の歴史なるか

哲學の發端(承前未完)

パピロニア人のロゴス觀
ヘーゲルに於けるイデアと辨證法(承前未完)

ケルシェンシュタイナーに就いて
カント就職論文考(未完)

数理哲學の一方針

自覺、綜合、自然

我、我、汝、社會(未完)

テオドール・リットを中心として

和辻 哲郎	一九一 1	一一—三三
杉 正俊	一九一 1	三三—七二
由良 哲次	一九一 1	七二—一二三
	一九一—一九一	九二—一九六
西田幾多郎	一九二 2	一三—一五〇
	一九二—一九二	一〇九—一三〇
前田 博	一九二 2	一五一—一九〇
長澤 信憲	一九二 2	一九一—二〇六
	一九二—一九二	一五五—一五五
高山 岩男	一九三 3	二二〇—一八五
佐藤 幸治	一九三 3	二六六—二五三
植田 壽藏	一九三 4	三〇四—三三七
久保虎賀壽	一九三 4	三七八—四三三
中原興茂	一九三 4	四三三—四四三
脇坂 光次	一九三 4	四三九—四四四
秋葉 貞二	一九三 4	四四一—四四六
天野 貞祐	一九三 5	四八一—四八五
下村寅太郎	一九三 5	四九〇—四九三
下程 勇吉	一九三 6	五八一—六一七
	一九三—一九三	七九七—八四六
	一九三—一九三	七〇七—九三三
重松 俊明	一九三 6	六八一—六七七

フエリツクス・クリツゲル氏
「學識全體と心的構造」
意識と存在(未完)
批判主義に於ける自由の問題
(承前)

リチャーズの文藝批評論

直接的にあるもの

获生徂徠の教育基礎論

シエリウングの積極哲學について
(未完)

意志自由問題の一つの解決

世界觀說論

岡式「時間」から岡式「世界」へ

高橋教授著「全體の立場」に因み
て拙著批評に答ふ

自創刊號至第二 百 號 總 目 錄

號 月 頁

岩井勝二郎 一 六 七 頁

伊達 四郎 一 六 七 頁

中林嘉太郎 一 六 七 頁

アラン・デル・アル・レー
李 敦 河 譯 一 六 七 頁

船山 信一 一 六 八 頁

高橋 俊乘 一 六 九 頁

赤松 元通 一 六 九 頁

高橋 敬視 一 六 九 頁

船山 信一 一 六 九 頁

田邊 元 一 七 〇 頁

山内 得立 一 七 〇 頁

(服部英次郎編)

寄 贈 圖 書

スピノザとヘーゲル

國際ヘーゲル聯盟日本版
岩波書店刊

印度哲學史

宇井伯壽著
岩波書店刊

吠檀多哲學の研究

金倉圓照著
岩波書店刊

プラソピステース
ツノ新物理學の宇宙像
二宮尊徳語錄
小樽高等商業學校一覽

寄 贈 雜 誌

哲學雜誌	十月	十一月號
倫理研究	十一月	十一月號
商學討論	十一月	十一月號
丁酉倫理講演集	十一月	十一月號
哲學改造	十一月	十一月號
社會學徒	十一月	十一月號
自然科學と博物館	十一月	十一月號
基督教研究	十一月	十一月號
顯悲	十一月	十一月號
國難	十一月	十一月號
生理學研究	十一月	十一月號
學校教育	十一月	十一月號
信濃教育	十一月	十一月號
奈良縣教育	十一月	十一月號

鹿野治助
岩波書店刊
山村清
恒皇社刊
菅原兵治抄
金雞學院刊